

自然農園だより



宮下 洋子
Hiroko Miyashita

いよいよ、ほうれん草の初出荷！

本年、初出荷

3月1日、法蓮草が、本年初出荷になりました。まだ食べていないので、どんな味かわかりませんが、きれいな法蓮草です。研修生の人たちと一緒に、皆で楽しく収穫しました。ほうれん草を収穫した後は、苗づくりの為に温室を作ります。自家採種した、トマトやナスやピーマンの種を植えていきます。いよいよ、今年の農作業が本格的に始まります。

ホルモン処理も、受粉バチも問題

ハウス栽培のナスやトマトなどは、ハチなどの昆虫もなく、強い風もない、締め切ったハウスの中に、早い時期に定植するので、花が咲いても着果できません。

そこで、慣行農法では、手作業でホルモン処理したり、受粉バチを入れたりするのですが、それぞれに問題があります。

外来種のマルハナバチを入れて、最後に殺さなければいけないのも、自分勝手だし、ホルモン処理はさらに心配です。



果菜類は、虫媒花であると同時に風媒花でもあるので、露地であれば一番花から着果するので心配ないのですが、春一番の締め切ったハウスでは、人工的な処理が必要になるのです。

去年は、トマトを作っている東旭川の息子（甘い水農園）が、一番花が着果しなくて苦労していました。今年是对策を立てているようです。

心配な新品種の開発

ところが、何か最近、種苗会社が、手間のかかる受粉作業の必要がない新品種（単為結果性品種）を開発して、農作業の省力化や効率化に寄与できると宣伝しています。でも、O-1テストしてみると ✕ なのです。



単為結果性ミニトマトの花

単為結果性というのは、雄しべの花粉がなくても着果するという事で、マリア様から生まれたイエスキリストのようなものです。

当然、できたトマトの種がなかったり、少なかったりするそうです。農作業が軽減されるのは歓迎ですが、大丈夫なのでしょうか。



また、ナスのヘタの所にとげがあって、これが刺さると結構痛いのですが、これまたトゲなしナスが品種改良されて出てきています。



トゲのあるナス

これも、O-1テストで ✕、何か不自然なところがあるのでしょうか？

ナスのトゲは、厳しい環境で生き抜くために、バラのようにトゲで武装して大事な実を鳥などから守っている、というのが有力な説のようです。ハウスで作るナスは、鳥や動物に食べられることもないから、遺伝子も次第に変化して、単為結果性のトゲのないナスが生まれたのかもしれない。

そういえば、露地に植えたナスのトゲの方が刺されると痛いような気がします。ハウスや高栄養で保護されて次第に弱体化した作物、という事も言えると思います。



本来生命体を構成するシステムは、成長を促進する遺伝子と、抑制する遺伝子が、お互いに拮抗しながら、バランスよく働くように作られています。

ところが、何かの刺激（放射能や薬品、気候変動、飢餓など）によって、遺伝子が、突然変異したり、欠損したりして、本来の性質を失うことがあります。

まさに単為結果性というのは、遺伝子の突然変異によって、成長ホルモン（オーキシン）を抑制する酵素を作り出す遺伝子が欠損して、成長ホルモンが異常増殖した結果、種のない実が付いたのです。

遺伝子は環境に適応するために変異するので、結果がヒトにとって、有害か、無害か、有益か、無益かはともかくとして、自然と言え、自然ではあるのです。

作物の品種改良の歴史

作物の品種改良の歴史は、以下の順番で変遷してきました。

現在では、①～⑤まですべて行われていますが、③は効率が悪いので、次第に⑤のゲノム編集技術に置き換わっていくのではないかと思います。

- ① 自然界で起きた突然変異により性質が変化したものを選抜する
- ② 異なる品種をかけ合わせる交配育種（交配による品種改良のことです）
- ③ 人為的に強い放射線を当てたり化学物質をかけたりして DNA を切って突然変異を起こさせる。
- ④ 別の生物から目的とする遺伝子を導入する遺伝子組換え
- ⑤ 同じ生物の中でゲノム編集をする

もともと、単為結果性の作物というのは、自然の形で偶然に発見されたものなのですが、子孫を残す為の種をつくるというエネルギーが弱くなる

わけですから、作物にとっては、永続可能な突然変異ではないような気がします。



さらに、ゲノム編集技術を用いた、リコピンが通常の4倍もあるトマトが開発され、商品化されるという事です。

これも、もっと心配です。0-1テストでは、単為結果性よりもさらに✕です。



ゲノム編集技術により開発された高 GABA トマト (F1 系統)
写真提供：筑波大学

ここまで書いて、時間切れになったので、4月号に続くにさせて頂くことにしました。次回はゲノム編集について、さらに詳しく書いてみたいと思います。

ヤケオさん の 援農日記

写真&文 オサイヤケオ



2月5日

陽射しがあると、2月上旬でもハウスの中は暖かい。裸足になっても平気である。春と勘違いした気の早い虫達がハウレン草の周りをうろちよろしている。糸のようなトンボが豆がらの上を歩いていた。極細のからだのどこに強い生命力が宿っているのか不思議である。



2月11日

以前勤めていた厚真町と日高の方面に向かう。海と山と牧場が織り成す景色が好きなのだが、残念なことにあちこちでギラギラを目にするようになった。浦河には、廃線した日高線を観光資源として活用しようと頑張っている人達がいるが、牧歌的で素敵な駅舎の横にもギラギラができてしまった。そんなに電気が必要なのだろうか？

札幌から農園に向かう途中の小樽の山には、ブンブンの計画があるらしい。テレビ塔より大きなものを27基も建設するというのだから、げっそりしてしまう。

農園の横を走る鉄道も廃線が決まった。跡地がちゃんと利用されるように見守っていかなければならない。

講演会でお弁当を作ってくれる円山のcafeに行く。「まほろばの農園まで行くななんて相当の変わり者ですね。」とオーナーに言われたが、笑って受け流す。「健康って何だとおもいますか？」と訊かれたが、僕は答えられなかった。

2月13日

本間青年とハウスの骨組の中で排雪作業をする。農園に來たばかりの頃は、

何をしてもすぐバテていた彼だったが、今は1時間くらい除雪しても平気である。仁木の空気と顧問のレシピで元気になったそうだ。

高価な作業用の手袋をしているので、理由を尋ねると、「手は感情にとってとても大切なところだから大事にしないと」と教えてくれた。丁寧に生きるというのは、こういうことなのかもしれない。泥だらけのまま使い続けている黄色いイボイボ軍手が、自分の生き方の象徴のようで恥ずかしくなった。



「健康ってなんでしょか？」会長と顧問に尋ねてみた。「まほろばのものを食べなくても元気であることだよ」会長が笑いながら答えてくれた。

顧問と僕も笑った。

顧問が会長を見つめながらしんみりと教えてくれた。「楽しく生きていることよ。私たちだってどっかがいなくなったら楽しくないだろうしね。」

帰りにお店に寄ってみる。お客さんも店員さんもニコニコしている。まほろばに集う人はみんな健康のようである。



2月26日

何日か前の大雪が嘘のような暖かい日だった。チンゲン菜は花を咲かしバッターも飛んでいる。「なつさと」の中山夫妻、甲田夫妻が丁寧に草とりをしてくれたのだろう、ハウレン草は収穫するのがもったいないくらい綺麗な列をなしている。

積もりに積もっていた倉庫の屋根の雪が落ちました。甲田夫妻は危うく巻き込まれるところだったようです。

もうすぐしたら苗作りも始まりますので遊びに来て下さい。



「懐しき未来」と私

中山 誠基



仁木町との出逢い

「自然栽培の木村秋則さんが北海道の仁木町で農業指導されているらしい。視察しに行かないか」

2013年当時、IT農業を推進している会社を支援していた私は創業者から提案されて、9月に仁木町を訪問した。歯のない木村さんが仁木町のとある高台の農地を視察しながら、「見晴らしはいい、水捌けはいい、風通りもいい、ここは最高だよ」と遠くに見える余市港に向かって歯に噛みながらお話されていたのを今でも覚えている。

日本で初めてりんご栽培に成功した歴史を持ち、本州から有名なワイナリーがより魅力的な農地を求めてこちらに移住しているなんてお話も聞いた。余市川に鮭の遡上が盛んなころ、命尽きるまで傷ついた体を左右に揺らしながら必



仁木町再訪時に奥様の奈月さんが、会長夫妻に感謝の気持ちで描いたイラストです

- 死に昇っている生命の尊さと美しさに感動した。こんな自然豊かなところで生活できたらなんて幸せなのだろうと、東京で生活していたわたしは、すぐには叶わない夢を覗いていたのかも知れない。

まほろばのご縁

そんな仁木町訪問で、映画「降りてゆく生き方」のプロデューサーで弁護士の森田貴英さんにお会いした。東京に帰ってからも森田さんから自然発酵の酒蔵で千葉寺田本家のこと、そして自然食品店の札幌まほろばのことを熱心に教えてもらった。

まほろば創業30周年に初めてまほろば本店に訪問した。魅力的な品揃えと生命力ある

売り場の中心でエリクサー母水を無料提供されていて、タンクを担いで給水に来られているお客様が絶えない。ここは天国かと心から驚いた。このときわたしは少しでもまほろばに流れている生命力を身近に置いておきたい、ご主人の宮下周平さんの創られた無限心球『結』を購入している。

そして2015年、宮下さんご夫妻が東京に来られたとき、森田さんと一緒に会食の場で、0-1テストで3食10日間実践すれば、血液は入れ替わり、病気の症状が消え、検査値が改善されるという専務の宮下洋子さんの発言から人体実験が計画された。その被験者としてメンバーの中で一番電磁波を浴び、当時もっとも不摂生であったわたしが選ばれたのは、まさに『結』が繋いでくださったご縁だと信じて疑わない。

10日間の人体実験

被験前に腸内細菌はじめ身体の検査を終えたわたしは、宮下さんご夫妻のご自宅で10日間、早寝早起きし、毎朝の体調体温チェック、3食毎回の0-1テストによる食事と、小別沢のまほろば自然農園でのお手伝いをさせて頂いた。最初の0-1テストで、わたしの身体はとてもまずい状態であった。寝る前に仕方なく仕事のためにパソコンを開くと、翌朝の体温が低いこ



と。東京では麻痺していた身体に蓄積した電磁波をアースするために農園を裸足で歩くことなどした。

しばらくすると重たい身体が軽くなり、感覚が研ぎ澄まされ、内臓の遺物が背中から体外に抜け出るような不思議な感覚を味わった。実験の詳細は洋子さんがまとめてくださったレポートが公開されているのでそちらに譲るが、食事では大好きなお肉を抜くことなく、身体の調律は整い、さらに強靱なメビウスの輪が形成されることで低かった体温は上がり、肝機能の改善、コレステロールバランスが逆転し、悪玉が減少、中性脂肪が低下、尿のPHが改善など、担当医が驚く結果となった。(この人体実験レポートは米国NASAにも届いているらしい)

わたしはこの10日間で、宮下さんご夫妻から命を救っていただき、さらに0-1テストというかけがえのない羅針盤の実体感と合わせて、その方法も伝授頂いたのだ。

妻と仁木町に再訪

しばらくして、まさか、まさか、宮下さんご夫妻が仁木町で新規就農されるというニュースが森田さん経由で飛び込んできた。

そして、この島国にも新型コロナウイルスという暗雲が差し迫ってきた2020年2月、宮下さんご夫妻がその対策と予防について札幌で講演されるということで、妻の



奈月と一緒に参加し、翌日に思い出の仁木町で、まほろば自然農園を訪問した。

そこで突然、周平さんから「近くの農地が売りに出ている、仁木町に移住しないか」とお誘い頂いたのだ。予期せぬお言葉に思わず妻と一瞬顔を見合わせてしまったが、お互い東京での暮らしに限界を感じていたところだったので満更でもない空気が流れる。

妻は東京でグルテンフリーのお菓子づくりをしていた。コロナ禍に伴い契約していたキッチン付きのイベントスペースの有効活用を自粛しなければならぬ状況に追い込まれていたこともあり、彼女にとっても仁木町でより食材にこだわったお菓子づくりができることは絶好の機会だと思えた。

期せずして、仁木町移住計画の始まりとなった。外に出ると、まほろば自然農園は真っ白の銀世界、やさしく降りつづける細雪がわたしたちを歓迎してくださっているかのようだった。



祖母ゆかりの地

こうして紆余曲折がありながらも、2021年7月にわたしと妻は、ここ仁木町に移住した。周平さんが『コロナと生きる』を上梓され、全国から集まってきている頼もしいお仲間と毎週会議を重ねながら、「懐しき未来」への想いを共有し準備を進めている。



お祖母ちゃん。小樽にて



お祖父ちゃん。小樽の海岸にて

● 移住を父に打ち明けたとき、驚いていたが吐
● 嗟に「それはおばあちゃんの生地付近だぞ」
● と示唆してくれた。わたしにとっては幼少期に
● とても可愛がってくれた埼玉のおばあちゃん
● である。祖父は父が中学生のときに急死されて
● しまったので、わたしは仏壇の顔写真でしか知
● らないが、数十年前に他界した祖母と一緒に実
● 家に帰った際にご挨拶をしている。祖母は小樽
● 出身である。祖父が仕事で小樽赴任になった
● ときに祖母と出会って父が生まれた。「そうか、
● おばあちゃんがわたしをここに呼んでくれた
● んだね」とわたしは父に返事した。

● もちろん宮下さんご夫妻の情緒と求心力が
● まほろばのみなさんがそうであるように、わ
● たしたちを護ってくださっていることは言う
● までもないが、私がこうしていま仁木町の
● まほろば自然農園で毎日研修生として立た
● せて頂いていることは『結』の必然だと思
● わずにはいられない。ご縁に感謝しながら、
● 今日0-1テストに従ってハウスに積もった
● 雪を下ろしている。

(つづく)



奈月さん、初めての雪国で、ハウスの大雪と大格闘の毎日。えらい!!